

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言	保健医療におけるロジスティクス 1 大学院保健科学研究院 院長 伊達 広行
◆研究室紹介	機能回復分野 運動・姿勢制御研究室 2 機能回復学分野 准教授 浅賀 忠義
◆新任教員紹介 3 基盤看護学分野 教 授 尾崎 倫孝 創成看護学分野 准教授 野口 眞貴子 医用生体理工学分野 教 授 加藤 千恵次 病態解析学分野 助 教 加賀 早苗
◆海外便り	米国核医学会にて演題発表 5 保健科学コース 修士課程2年 富山 勇輝
◆学生寄稿	理学療法学実習を終えて 6 医学部保健学科 理学療法学専攻4年 庭山 空見子
◆報告事項 7



保健医療におけるロジスティクス

大学院保健科学研究院 研究院長 伊達 広行



現代の医学と医療における課題には、感染症対策、移植・再生医療、がん治療、などがあり、加えて日本においては特に、少子高齢化社会や生活習慣病への対応など、多岐にわたっています。こうした中で保健科学（Health Science）とは、けがや疾病に直接的に対処する行為や対策よりも、健康体もしくは病気等の前段階における予防と予知、健康の維持・増進、そして治療後の更正や老化への取組みなどに重点を置く学術領域といえます。この領域の形成は、偶発的なものでも特異的なものでもなく、けがや疾病の対処や日常生活に付随する不可避的な営みに端を返し、生存環境の変化と共にその重要性を意識せざるを得なくなった帰結と考えられます。身体の常態を害した時に多くの人がとる行動・対策が、迷信や呪術から科学に基づいたものに至るまで、非常に長い時間を有したといえるかもしれませんが、延命を可能とする技術が高度なまでに発達した今こそ、我々は、より

良く生きるために、本当に大切なことは何なのかを問うべきであると思えてなりません。殊に、世界人口が70億人を超えた今日、発展途上国の医療基盤の支援、広汎性の感染症の防御、食糧の供給と安全性の確保、国別・年齢別人口動態の変化が及ぼす福祉への影響、といった全世界的な問題が個人に波及し、それらはすべて保健科学の対象でもあります。

ロジスティクス(logistics)という用語があります。元々は「兵站(へいたん)」を表す戦争用語のようですが、「必要なものを」「必要な時に」「必要な量を」「必要な場所に」という、経済活動などにおける物流の最適化をねらいとする過程を意味します。日本は、太平洋戦争にて、米国との圧倒的なロジスティクスの差を経験しました。しかし現代でも、精神論が横行するかのごとく、この点が軽視されることが多いような気がします。例えば、大震災後の被災地への対応といった問題に対して、「皆で協力して支援を」「互いを尊重し助け合おう」などの声が上がるのは良いとしても、困っている人たちが本当に何を欲しているのか、支援の手段として何が必要なのか、という現実的な課題に対して、具体的な方策を提示できず、各論の議論になると決断できず、面倒な作業は他人に任せ責任の所在は明確にしない、結果として後手後手に回る、というのは言い過ぎでしょうか。問題解決の効果的な方法の着想と、それを実現するための(人的および物的)資源の配置に関する戦略は、同程度に重要なはずですが。

医療行為におけるプロセスを例にとってみます。ある病気になる患者さんが、臨床検査や放射線科の検査を受け、その結果によって、医師が診断し手術等の治療を行うとします。検査等の必要な情報収集は、もちろん治療行為の前だけとは限りません。この間、看護師は、患者さんの容態を常に気遣いながら、検査や直接的な治療行為のお膳立てをし、その後の必要な処置にも携わります。回復のための(おそらくは辛く長い)過程では、例えば、日常の身体的運動ができるよう理学療法士が、社会生活への復帰支援には作業療法士が活躍します。このように、直接的な診断・治療時以外の多くの時間は、医師以外の医療専門職者が担っています。それらの行為は、診断・治療を支援する(いわば後方支援的な)役割として位置づけられるといえますが、これはまさにロジスティクスだと思えます。ただしそれは、医師にとって必要な情報や物資(そしてマンパワー)を的確に供給するというよりは、患者さんの回復のために、モノと技術そしてケアの最適化を目指していると考えられます。そして根底には、人間としてあるべき状態の維持と、本来定量することの困難な「質」の追求があります。

近年日本は、少子高齢化にますます拍車がかかり、若者たちに過大な期待や責任を負わせつつあるように見えます。その一方で、多くの若者が、ささやかな安定性やセンチメンタリズムにはしる傾向を有し、無意識のうちに小市民化しているように感じます。それ自体は悪いことではないかもしれませんが、国内・国外に限らず、他者との関係の中で活動し、判断し、長期的な計画を遂行して行こうとするときには、時として、強靱な意志と冷徹な理性が求められるはずですが。比較的社會が平穩な今、個人の判断や組織全体の決定は、恣意的であり、周囲の空気や感情に左右される情緒的なものであり、とかく論理はそれを正当化する後付けとなっています。しかしながら、現在の日本ほど、歴史的に見て、自由にもが言え公平性を求めることのできる状態はないのも事実です。このような環境にあればこそ、将来の不確定さを踏まえ、あらゆる困難に立ち向かう準備としての研鑽を積んでおく必要があると思えます。大学が象牙の塔と呼ばれた時代から随分経っていますが、我々個々人にも、社会への還元と次代へ良いものを残そうとする基本姿勢が必要ではないでしょうか。ロジスティクスとは、その際の(理想を実現する際の)、「現実世界と生身の人間を認識する過程」であると思うのです。保健医療は、成果の反応や手応えを比較的容易に感じることのできる分野であるといえます。過去の経験や知見の積み重ねが強く生きるこの世界にて、継往開来の意志をもって突き進むよう心を新たにする次第です。

工学出身の私は理学療法学を学んだ後、主に中枢神経系疾患を対象とする臨床経験を背景に現在の研究テーマに辿り着きました。運動制御学の第一人者であるマーク・ラタッシュ教授(ペンシルベニア州立大学)の研究室で培った運動制御理論と解析手法を理学療法分野に応用すべく研究を行っています。研究テーマは、正常な運動・姿勢制御および中枢神経系障害による異常姿勢制御のメカニズムの解明と運動学習で、バランス障害に対するリハビリテーション科学の発展に寄与することを研究の目的としています。実験方法は、主に三次元動作解析システム・床反力計・筋電計を用いて運動力学および運動学的データを収集しています。

現在の研究室メンバーは、大学院保健科学院に在籍する大学院生6名(博士後期課程1名、修士課程5名)と海外留学生1名で構成されています。修士課程の2名は社会人で、中枢神経系疾患を主に対象としている医療機関に従事しており、臨床経験に基づく研究ニーズを提供する貴重な人材です。また、留学生は中国で医師として研修中にリハビリテーション医学に興味を持ち、現在は本学院修士課程入学をめざして語学の修得に励んでいます。さらに、本年9月からは本学研究院初の海外客員研究員が加わる予定です。彼女は台湾のKaohsiung 医科大学理学療法学科准教授で、英国で博士号を修得し、帰国後理学療法に関する研究成果を蓄積してきました。毎週行われる本研究室のゼミでは、英語が主流となるでしょう。

研究テーマは、健常者を対象とした基礎的研究とバランス障害を有する患者を対象とした臨床的研究の二つに大別されます。



■運動・姿勢制御研究グループ

■姿勢制御のメカニズムと運動学習

最近の研究成果は、①フィードフォワード制御(予測的姿勢制御)およびフィードバック制御(代償的姿勢反応)の関連性、②卓越したフィードバック制御の特性について明らかにしました。さらに、③動的バランスの姿勢戦略と学習効果について研究しています。また、本年度から④フィードバック刺激による学習効果について、⑤加齢による姿勢制御の特性について研究を進めていく予定です。②はトップアスリートを対象としており、スポーツ科学を専門とする広島大学の渡部和彦名誉教授、岩国短期大学の王芸准教授、北翔大学の山本敬三准教授のご支援を受けています。

■中枢神経系障害のバランス制御

脳血管障害、パーキンソン病、小脳性失調症患者を対象に、姿勢制御メカニズムの疾患特性について解明し、効果的なバランス回復のための学習方法について探求しています。最近の研究テーマは、①脳血管障害による片麻痺患者の安定性限界と足圧分布の特性、②パーキンソン病患者のバランス制御について研究しています。臨床研究を進める上で、札幌すがた医院、札幌病院、北祐会神経内科病院のご支援を受けています。

研究室メンバーの国際化を進めるとともに、最新知見を臨床現場に還元すべく研修会を開催しています。今年は3-1教室が満席となり、本研究テーマに対する臨床における関心の高さが伺われます。



■研究室主催の研修会

新任教員紹介

御挨拶

基盤看護学分野 教授 尾崎 倫孝



平成24年4月1日より北海道大学大学院 保健科学研究院教授として赴任いたしました。

昭和59年岡山大学医学部を卒業後、第二外科(寺本滋教授)に入局し、当初胸部外科・消化器外科の指導を受けることで外科医としてスタートすると

ともに、大学院生として病理学教室にて粟井通泰教授指導のもと研究の第一歩を踏み出しました。当時は、酸化ストレスの研究が盛り上がっていた時期で、私の学位論文も活性酸素の測定に関するものでした。その後現在に至るまで活性酸素・レドックス関連の研究は続けておりますので、何事も“プライミング”というのは大切なものだと感じます。

臓器移植に興味を持っていた関係で、平成2年からは東京女子医大第三外科(太田和夫教授)にて腎不全外科、腎・脾移植、肝移植の臨床と研究に携わりました。平成9年からは、米国ジョンスホプキンス大学外科続いて内科に留学し、Rac1依存性細胞内レドックス制御およびレドックス感受性シグナル伝達の研究を始めました(G. Bulkley教授, A.S. Klein教授, K. Irani准教授の指導のもと)。帰国後、国立小児病院小児医療研究センター(現・国立成育医療センター研究所)に

て、故鈴木盛一先生のもとで移植・レドックス研究を続けました。その後、ピッツバーグ大学から北大に戻ってこられていた藤堂省教授にお誘いいただき北大に異動、平成16年から置換外科・再生医学講座(特任准教授)、平成19年から分子制御外科学講座(特任教授)などを経て、今回北大・保健科学研究院教授の職をいただくことになりました。小児医療研究センター、北大では、臨臨床的(外科的)な観点からみた病態の解析と研究推進に重点をおき、様々なストレスによる細胞・臓器応答メカニズムの理解(とくに肝臓を中心とした生理・病態解析, Jak/STAT3およびPI3-K/PDK1/Aktを中心としたシグナルと細胞機能の解析)とその生体レベルでの可視化(光イメージング法による)に興味をもって研究を進めてまいりました。同時に、NFkB, AP-1を具体的ターゲットとした分子標的薬(免疫抑制剤, 抗炎症剤)の開発にも関わってきました。

今後は、生体・臓器・細胞の連関のなかでストレス応答のメカニズムと生体レベルでの測定(生体イメージング)を中心に研究を進め、保健科学的観点から、現在のストレス社会をしながらにかつ力強く生きていくための提案をしていければと思っています。

皆さまからの一層のご指導ご鞭撻を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

新任教員紹介

御挨拶

創成看護学分野 准教授 野口 眞貴子



本年4月に、北海道大学大学院 保健科学研究院に着任しました。北海道大学という、恵まれた環境で仕事をさせていただいています。

私は助産師として聖路加国際病院で勤務したのち、国際協力機構(JICA)で母子保健の専門家として仕事をさせていただきました。なかでもアルメニア共和国での2年間では、アルメニアで初の政府開発援助である技術協力プロジェクトのリーダーとして、日本のプレゼンスをどのように示すかということを考え、実践するという機会をいただきました。

このような経験から、日本が独自の国際貢献ができる分野のひとつとして母子保健、助産があると考えています。日本の助産は、「女性とともにある」という本質に深く根ざしたものです。妊娠、出産の安全を保障しつつ、女性と子どもの将来にも

深く影響する出産を支える丁寧で細やかなケアが日本の助産の強みであり、国際的に誇れるものです。

この助産を科学的に追究し、実践につなげていくことが、私の主たる研究テーマです。これまで助産ケアを受けた女性の出産体験が、その女性や子どもに長期的な影響を及ぼすことを共同研究で示してきました。例えば女性がより豊かな出産を体験すると、女性は母親役割を肯定的にとらえられるようになります。このことは、産後鬱や虐待の予防にもつながると考えます。また子どもを育てている母親の食習慣が子どもの食習慣と関連することを示し、母親を対象とした健康教育の必要性を研究フィールドの自治体に提言しました。

母親が健康になれるように教えると、その母親は全ての人たちが健康になるようにするという言葉もありますが、母親、そして女性の健康が家族の健康を培い、コミュニティの健康の基盤になります。女性、母親、子どもの健康を切り口に、これを支える日本の助産や母子保健の特性を明らかにし、国内だけでなく国際協力でも実践したいと考えています。

新任教員紹介

御挨拶

医用生体理工学分野 教授 加藤 千恵次



昭和53年に愛知県立一宮西高校を卒業し、同年4月に名古屋大学工学部原子核工学科に入学しましたが、暑苦しい名古屋から逃げたくなり、名大3年終了直後に北大医学部へ行きました。今思えば原子力発電の世界から抜け出て良かったと思

いますが、3年間まじめに放射線工学を学んだ証を残すつもりで医学部在学中に第1種放射線取扱主任者免許を取得しました。それが契機で昭和62年北大核医学講座に入局し、放射線科研修医、核医学講座助手、トレーサ解析学講座助教授、保健学科准教授を経て現在に至ります。その間、平成9年にフィンランド国立トゥルク大学PETセンターでPET

画像解析プログラム技術の修得と研究を行い、それが現在の専門分野となりました。そこで習ったC言語の知識は私の最も貴重な財産になりました。北大病院にPETが導入された平成10年からPET検査法の開発と解析プログラム作成に追われ、そのプログラムを動かすコンピュータの作成にも没頭しました。以前からコンピュータを作るのも大好きで、研究室内は秋葉原の中古PC部品店のような状態です。趣味が仕事になったような現状は大変幸せなことだと思います。大病院からは常にPET、MRIやCT画像データから心筋や脳の血流量などを定量するプログラム開発の依頼があり、それらを大学院生と一緒に楽しく開発し研究活動を続けています。自分の脳内に残っている医用画像解析プログラムの知識や技術をできるだけ大学院生や若い研究者に継承できるよう頑張りたいと思います。

新任教員紹介

御挨拶

病態解析学分野 助教 加賀 早苗



このたび、北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野に異動してまいりました加賀と申します。私は、平成6年から本年3月まで北海道大学病院検査・輸血部に臨床検査技師として勤務し、主に生理機能検査を担当してきました。脳波・誘発筋

電図検査、心電図検査などの検査経験を積み、平成10年からは、それまで検査・輸血部では行われていなかった超音波(心エコー)検査に挑戦し、検査技術や専門的知識を学びつつ、それを実践してきました。これまで、肥大型心筋症の左室流出路狭窄の新しい診断法、肥大型心筋症や高血圧による左室機能障害の機序、および、左室肥大に伴う右室機能障害の病態

分析などの研究にも取り組んできました。近年、心不全の原因として、収縮障害よりもむしろ左室拡張障害が重視されるようになってきましたが、その病態や検査法には、まだわからないことが数多く残されています。今後は、この左室拡張障害や心不全の病態を、心エコー検査でより的確に評価するための研究をさらに進めていきたいと考えております。長年、部門や部局の垣根を越えてご指導をいただいていた三神教授のもと、より深く心エコー研究に専心し、また、同様に親しくご指導をいただき、昨年ご逝去された小野塚准教授のご遺志を継ぎたいと及ばずながら思っております。これからは北大病院での検査実務経験をベースに、若い大学院生の皆さんと切磋琢磨しながら、教育と研究に真摯に取り組んでいきたいと思

米国核医学会にて演題発表

保健科学コース 修士課程2年 富山 勇輝

2012年6月9日～6月13日の間にアメリカ、フロリダ州マイアミにて開催された米国核医学会(SNM)に参加してきました。今回会場となったマイアミという場所は熱帯気候のリゾート地として世界的に有名であり、町全体に漂うどことなく楽しい雰囲気が印象的でした。そんな中、学会の会場はビーチのそばであったため、水着の観光客に交じるスーツの学会参加者はさぞかし奇妙に映った事と思われます。

この学会で私は二つの演題に関して発表を行いました。

一つ目は、MRIを用いた心筋血流の定量化に関する事です。これまで、定量解析というと実際に体に入れた放射能の測定を行う核医学の専売特許の様に論じられていましたが、近年MRIの機器技術の進歩によりMRIによる定量解析という研究も見られるようになってきました。そこで今回は、MRIを用いて心臓の血流量の定量化が可能なのではないかという内容に関して発表を行いました。

二つ目は、PET/CTの定量性に関する話をしました。PET/CTでは定量測定を行うためにCTを用いた体の密度の測定を行っています。しかし、この測定された密度の分布とPET撮影時の密度分布は心臓の拍動等の関係で少なからず、ずれが生じてしまいます。この様な、密度分布のずれにより生じる誤差に関して発表を行いました。この二つ目の発表に関しては学会賞を受賞することができました。



■マイアミコンベンションセンター前にて



■発表風景

自分の発表以外では主に画像処理、定量解析という分野に関するセッションを中心に聞きました。特に、MRIを用いた定量解析に関するセッションが多く行われておりとても興味深く聞く事ができました。また、機器展示ではPET/MRIやSPECT/CTといった現在最先端の技術に触れる事も出来ました。この様な、経験を今後の自分の研究に生かしていくことができれば良いと思います。

今回初の海外学会で最も印象に残った事は、英語の大切さでした。今回の学会で、“自分の考えを聞いてもらいたい”、“相手の考えを理解したい”と思った時の英語での表現方法が分からない、上手く聞きとることができないという場面を多く経験しました。研究活動を続けていく上で自分を理解してもらう、相手を理解するというのは最も大切なことであり、自分にとって英語の大切さを認識する良い機会であったと思います。

また、この学会は私にとっては初めての海外渡航であり学会会場以外でも様々な経験をする良い機会でした。レストランでの注文、空港での対応等、細かな動作一つとっても私にとっては勉強の場になったと感じています。

最後に、海外学会という貴重な機会を設けて頂いた加藤先生にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

理学療法学実習を終えて

医学部保健学科 理学療法学専攻4年 庭山 空見子



私たち理学療法学専攻4年生は今年の春、今までの学習の集大成である2か月間の総合実習を行いました。私は今回、北海道の小児医療の中枢を担う北海道子ども総合医療療育センターで実習をさせていただきました。毎日スタッフの方々から熱意溢れるご指導をいただき、理学療法の知識や技術を深め、患者さんとの接し方や治療の展開の仕方について実践を通して学ぶことができました。また、障害を持って生まれた患者さんが力強く毎日を生きている様子、辛い治療に耐え、リハビリに励んで上手に座れるようになったり歩けるようになったりする姿を間近で見て、その一端を担うことのできる理学療法士という仕事の魅力ややりがいを再認識しました。

センターには長期に入院される患者さんが多く、成長期の患者さんにとってそこは治療の場であるとともに生活の場、そして学習の場でもあります。治療の痛みや辛さを励まし合い、他の患者さんの退院をみんなで喜んで、障害と共に成長していく小さくても力強く温かい患者さんの姿を見て、自分もリハビリを通して力になりたいと強く感じました。リハビリを行っていく上で、患者さんがこれからご自分の障害とどう向き合い、どのような人生を歩んでいくのかを広いスパンで考えることが理学療法士として必要であり、患者さんとたくさんお話しし、悩みや不安に耳を傾け、個性を知り、楽しいこと嬉しいこと、好きな遊びや将来の夢を踏まえてリハビリの内容や目標を設定していくのだということが分かりました。患者さんが楽しく希望を持って進めていける治療プログラムを考えることは難しく悩むこともありましたが、ゴールの一つひとつ達成した時の患者さんの笑顔を見た時にリハビリの大切さとやりがいを感じました。

大学の授業で学んだ基礎医学が臨床につながり役立つ時に学問のおもしろさを感じ、同時に自分の勉強がまだまだ足

りていないことに気づき、実習中は帰宅後に教科書を開いて確認することも楽しく感じられました。臨床の場面ではただ教科書に載っている治療を型どおりに行うのではなく、一人ひとりの患者さんにあった方法をその場で考え実施していくということが分かり、そのためには多くの知識だけでなく情報をすぐに引き出せる柔軟性や患者さんを観察する力など臨床に出てからも経験を積み身につけていかなければいけないことがたくさんあるということが分かりました。今回の実習ではクリニックという形で複数の先生方の理学療法を見学する機会もいただき、より多くの考え方や治療法、患者さんとの関わり方を学びました。それぞれの先生方にそれぞれの理学療法の形があり、先生方も文献や先生同士の情報交換から毎日勉強を続けていらっしゃるって、日々進化していく医療の世界での勉強の大切さを知りました。私も学校で教わってきた学問を基にひとつでも自分の得意分野を見つけ「これが自分の理学療法だ」と言える形を磨いていき、自分の理学療法に誇りを持てる理学療法士になるという目標ができました。

今回の実習では理学療法士の仕事だけでなく、リハビリ室では作業療法士や言語聴覚士、病棟では医師や看護師の方々、そして隣接する養護学校の先生方ともお話をすることができました。他職種の情報共有や連携の大切さも学ぶことができました。

不安と緊張の中始まった総合実習でしたが、優しい先生方と患者さんから多くの事を教えていただき、他の実習生と支え合いながら有意義な2か月間を終えました。今回の実習で学んだこと感じたことを決して忘れず、患者さんに親身になって寄り添うことのできる理学療法士を目指してこれからも学問に励んでいきたいと思えます。



サステナビリティ・ウィーク2012へ参加

北海道大学は持続可能な社会の実現に向け2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催しております。保健科学研究院では今年も下記の2つの事業を企画しました。

●多くの皆様の参加をお待ちしております。(事前申し込み受付中です。10月31日(水)まで)

企画名	ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ
開催期間	11月3日(土・祝) 13:00～16:00
主催者	大学院保健科学研究院公開講座委員会
会場	大学院保健科学研究院 3-1講義室
行事概要	保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」と題し、3名の講師陣が、サステナビリティ・ウィーク2012のテーマである「安心して暮らせる社会や環境、支え合う仕組み」をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説します。ご期待ください。 「アレルギーの不思議」 小林清一 教授 「あなたの健康生活を支える看護師活用術」 良村貞子 教授 「今こそ考えるとき、高齢者の延命治療」 宮本顯二 教授
事前申し込み	10月31日(水)までに下記 E-mailもしくは電話にてお申し込みください。
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

●多数のご参加ありがとうございました。(以下の企画は、終了しました。9月18日(火)実施)

企画名	安心した暮らしと在宅ケアを考える
開催期間	9月18日(火)13:00～15:30
主催者	大学院保健科学研究院
会場	学術交流会館 第1会議室
行事概要	急速に高齢化が進む日本では、日常生活の中で健康を維持管理できることが重要です。また、看護・介護が必要になっても在宅で安心な生活できれば、病院ベッド数の不足を解消するとともに、「自宅で最期を迎えたい」という国民意識にも適います。本セミナーは、在宅を中心に安心した暮らしを支えるための健康科学・技術に関する紹介します。
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

平成24年度(第6回) 北海道大学医学部保健学科長賞表彰式を挙

平成24年9月20日(木), 保健学科会議室において「北海道大学医学部保健学科長賞」表彰式が行われ, 保健学科の教員が列席のもと, 伊達保健学科長から被表彰者5名に, 賞状および記念品が贈呈されました。

この表彰は, 医学部保健学科4年次に在籍する学生で, 特に優秀な成績を修め, 他の学生の模範となると認められた方へ授与されるものです。

このたび下記の方々が表彰を受けられました。

看護学専攻	蔵 満 美 奈 さん
放射線技術科学専攻	松 谷 悠 佑 さん
検査技術科学専攻	青 木 葉 香 さん
理学療法学専攻	長 山 唯 さん
作業療法学専攻	西 森 優 香 さん



■記念写真



平成24年度 科学研究費(文部科学省・日本学術振興会)採択一覧

研究種目	新規 継続	氏 名	分野・職名	研究課題
基盤研究(A)	継続	尾崎 倫孝	基盤看護学 教授	光プローブを応用した生体イメージング法による画期的術中ライブ診断法の開発
基盤研究(B)	継続	林 裕子	基盤看護学 准教授	生理学に基づいた意識障害患者への看護プログラムの構築
	新規	西岡 健	医用生体理工学 教授	がん細胞は自身の生存をかけた放射線域を逃れるべく上皮間葉移行をなしうるか
	新規	良村 貞子	基盤看護学 教授	潜在看護職者の在宅ワークと連携する遠隔健康相談システムの開発と検証
	新規	矢野 理香	基盤看護学 准教授	回復期脳血管障害患者に手の動きの自覚と語りを促す手浴ケアの成果モデルの効果検証
基盤研究(C)	新規	加藤千恵次	医用生体理工学 教授	3テスラMRIを用いた心筋血流定量および梗塞病変の定量検出
	新規	笠原 敏史	機能回復学 助教	加齢に伴う姿勢と運動制御の不安定化メカニズムの解明
	新規	吉田 繁	病態解析学 助教	HIV遺伝子検査のための新しい標準物質の開発
	新規	佐伯 和子	創成看護学 教授	行政保健師の多様なキャリアに対応したキャリア総合的な発達測定尺度の開発
	新規	神島 保	医用生体理工学 教授	関節リウマチ超音波検査:毛細血管ファントムの再現性検討と機種間キャリブレーション
	継続	大槻 美佳	基盤看護学 准教授	多発性硬化症の高次脳機能検査:日本語版作成と臨床応用
	継続	伊達 広行	医用生体理工学 教授	放射線被曝影響解析に向けた線量付与の統計的モデルの構築
	継続	恵 淑萍	病態解析学 准教授	メタボリックシンドロームにおける血漿過酸化脂質代謝の研究
	継続	岩本 幹子	基盤看護学 准教授	医療系大学院におけるインタープロフェッション教育プログラムの構築と評価
	継続	青柳 道子	基盤看護学 講師	がん患者の配偶者が受けるソーシャルサポート尺度開発と精神的健康との関係一
	継続	高山 望	基盤看護学 助教	高次脳機能障害患者を支える主介護者の退院時指導プログラムの構築
	継続	佐藤 洋子	創成看護学 教授	小児医療における子どもの意思決定と看護支援に関する基礎的研究
	継続	安積 陽子	創成看護学 准教授	早産で生まれた子どもへのスリープマネジメントによる睡眠習慣確立プログラムの構築
	継続	進藤ゆかり	創成看護学 助教	オピオイド鎮痛薬を使用している難治性非癌性疼痛患者の慢性疼痛との共存の課程
	継続	小笠原克彦	医用生体理工学 教授	GISに組み込んだシステム・ダイナミクスによる医療環境の予測と可視化
	継続	武田 晴治	健康科学 特任准教授	一粒子レベルでのリポ蛋白質酸化状態解析
継続	福島 順子	機能回復学 特任教授	片麻痺患者に対するイメージ訓練の有効性とその脳内機構一機能的磁気共鳴画像一	

研究種目	新規 継続	氏 名	分野・職名	研究課題
基盤研究(C)	継続	傳田 健三	生活機能学 教授	児童・青年期の双極性障害に関する臨床的、疫学的 研究
	継続	境 信哉	生活機能学 准教授	重度心身障害を伴う大脳性視覚障害児・者を対象と した視覚行動評価尺度の開発
	継続	藤川 恵子	生活機能学 客員研究員	高眼圧性RGC障害新規評価系の開発：緑内障疾患 モデルVavマウスを用いた研究
	継続	千葉 仁志	健康科学 教授	全リポ蛋白粒子の粒子径と疎水性に関するデータ ベースの作製
新学術 (研究領域提案型)	継続	山内 太郎	健康科学 准教授	狩猟採集民の身体とフィットネス：「遊び」と「食」から みた子どもの環境適応能
	新規	山口 博之	病態解析学 教授	アメーバに共生する難培養性細菌のゲノム解析から 紐解くマトリョーシカ進化原理
挑戦萌芽	継続	尾崎 倫孝	基盤看護学 教授	細胞死(オートファジー・アポトーシス)による肝再生 制御メカニズムの解析
	継続	斎藤 健	健康科学 教授	環境汚染化学物質による中枢神経系に対する影響 の多角的評価法の構築
	新規	井上 馨	生活機能学 教授	眼圧コントロール作用点の同定：高眼圧性疾患モデ ルマウスの原因分子Vavによる研究
	新規	荒木 奈緒	創成看護学 助教	胎児異常を診断された女性に対する妊娠期から育 児期への助産学的アプローチの検討
	新規	山口 博之	病態解析学 教授	アメーバ共生細菌プロトクラミジアアンキリンエフェ クターの機能解析
	新規	山本 徹	医用生体理工学 教授	MRI複素誘電率画像は細胞内水分子のネットワー ク構造を反映するか？
	新規	石津 明洋	病態解析学 教授	自己血管内皮細胞反応性NKT細胞による中小型血 管炎発症モデル
	新規	大内 潤子	基盤看護学 助教	好物を食べると摂食・嚥下運動は向上するのか：生 理学的指標を用いた検討
若手研究(B)	継続	荻田 珠江	創成看護学 助教	病院・診療所における産婦の主體的な出産を達成す る助産ケアとその特殊性
	継続	平野美千代	創成看護学 講師	効果的な介護予防ケアの推進に向けた要支援前期 高齢女性の社会活動尺度の開発
	継続	渡辺 玲奈	基盤看護学 助教	総合周産期母子医療センターの安全性を保証した 施設計画ガイドラインの開発
	継続	本田 光	創成看護学 助教	子育て世代における「地域とつながる力」の概念構築
	新規	齊藤 展士	機能回復学 助教	上肢の運動パフォーマンス改善に寄与する姿勢学習 メカニズムの解明
研究活動 スタート支援	継続	小林 巧	北斗関節機能 障害予防学 特任助教	TKA後の歩行能力に影響を与える因子についての 検討
特別研究員 奨励費	継続	田村 彰吾	博士後期課程 3年	脳由来神経栄養因子(BDNF)の循環血液中におけ る存在様式の解明
	継続	櫻井 俊宏	博士後期課程 3年	トリグリセリド代謝異常に適した新しい酸化ストレス マーカーの開発
	新規	石田 香澄	博士後期課程 1年	病原体クラミジアのリンパ球細胞を巧みに利用した 感染防御回避機構の解明

研究助成採択状況(24年1月～24年7月)

所属・氏名	財団等名称	種 目	題 目
機能回復学分野 助教 寒川 美奈	公益財団法人ヤマハ 発動機スポーツ振興 財団	スポーツチャレンジ 研究助成	筋腱機能に着目したダイナミックストレッチング の有効性に関する検証
創成看護学分野 講師 中澤 貴代	日本看護学教育学会	日本看護学教育学会 2012度研究助成	助産師学生が行うバースレビューの卒業時到達 度の分析
基盤看護学分野 准教授 鷲見 尚己	公益財団法人 政策医療振興財団	平成24年度公益 財団法人政策医療 振興財団研究助成金	日本語版-The Care Transitions Measure- の開発と信頼性・妥当性の検証
病態解析学分野 教授 石津 明洋	公益財団法人 武田科学振興財団	研究会等の開催支援	第18回血管病理研究会

受賞状況(24年1月～24年7月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
病態解析学分野 教授 石津 明洋	The Asia-Pacific Meeting of Vasculitis and ANCA Workshop 2012 Poster Award	Abnormal Formation and Impaired Degradation of Neutrophil Extracellular Traps Induced by Propylthiouracil are Implicated in the Pathogenesis of MPO-ANCA-associated Vasculitis.
基盤看護学分野 助教 高山 望	日本慢性看護学会 学会賞	進化する慢性病看護
基盤看護学分野 助教 佐藤 三穂	The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifer Good presentation awards	Factors related to social activities in cancer patients receiving outpatient chemotherapy in Japan
創成看護学分野 助教 本田 光	日本地域看護学会 奨励論文賞	コミュニティにおける人々の他者への信頼を測定 するための尺度開発と理論的検証
博士後期課程2年 澤村 大輔	北海道作業療法学会 学術奨励賞	回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者 の独居生活に影響する因子
修士課程2年 富山 勇輝	日本放射線技術学会 第68回総会学術大会銀賞および学生賞	Quantification of myocardial blood flow with 3.0 Tesla MRI perfusion image: Comparison with 15O-H2O PET
修士課程2年 富山 勇輝	Seminar of Nuclear Medicine Technologist Session Technologist Oral Cardiovascular Presentation Award, The 3rd Place	Errors in attenuation correction with ECG-gated myocardial PET/CT images: Evaluation with phantom study

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成24年2月～平成24年8月)

分 野	職 名	氏 名	備 考
健康科学	教 授	千葉 仁志	5編 内3編10%以内 ※1 内1編20%以内 ※2
機能回復学	助 教	齊藤 展士	
病態解析学	教 授	山口 博之	6編 内1編20%以内 ※2
生活機能学	准教授	境 信哉	10%以内 ※1
病態解析学	助 教	吉田 繁	20%以内 ※2
医用生体理工学	教 授	西岡 健	
病態解析学	准教授	惠 淑萍	20%以内 ※2
病態解析学	教 授	石津 明洋	10%以内 ※1
医用生体理工学	教 授	伊達 広行	
健康科学	特任教授	酒井 正春	
医用生体理工学	教 授	加藤千恵次	
健康科学	教 授	齋藤 健	
病態解析学	助 教	松尾 淳司	
基盤看護学	助 教	佐藤 三穂	

【研究助成制度】

- 対象：(1) 英文原著論文(査読有, IF有, first author)を執筆した教員
 (2) 英文原著論文(査読有, IF有)のcorresponding authorとなった教員
 (ただし, (1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法: 論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分

※2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

人事異動

平成24年3月31日

(定年)

松下 通明 基盤看護学分野教授

(任期満了)

永井 彩音 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(教務担当)

四宮 ちひろ 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(図書担当)

平成24年4月1日

(採用)

尾崎 倫孝 基盤看護学分野教授

野口 眞貴子 創成看護学分野准教授

恵 淑萍 病態解析学分野准教授

三浦 由依 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(教務担当)

橋本 由衣 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(図書担当)

(昇任)

加藤 千恵次 医学生理工学分野教授(病態解析学分野准教授)

(転入)

加賀 早苗 病態解析学分野助教(北海道大学病院主任臨床検査技師)

三本木 毅 医学系事務部保健科学研究所事務課長(理学・生命科学事務部事務課課長補佐)

武藤 幹夫 医学系事務部保健科学研究所事務課係長(庶務担当)

(総務企画部人事課主任(共済担当))

武隈 香 医学系事務部保健科学研究所事務課(教務担当)

(獣医学事務部(教務担当))

(転出)

松岡 典子 北方生物圏フィールド科学センター事務部事務長

(医学系事務部保健科学研究所事務課長)

菊池 洋美 農学事務部係長(人事担当)

(医学系事務部保健科学研究所事務課係長(庶務担当))

石川由香里 工学系事務部教務課係長(大学院担当)

(医学系事務部保健科学研究所事務課主任(教務担当))

平成24年6月30日

(任期満了)

菅原 里美 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(会計担当)

平成24年7月1日

(採用)

宮崎 亮 健康科学分野特任助教
古屋 あづみ 医学系事務部保健科学研究所事務課事務補助員(会計担当)

(配置換(昇任))

武田 晴治 健康科学分野特任准教授(健康科学分野特任助教)

平成24年7月17日

(採用)

シュルスタ ロジート 健康科学分野特任助教

平成24年8月1日

(配置換)

小田 嶋裕輝 基盤看護学分野博士研究員(北海道大学病院看護技術補佐員)





広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

齋藤 健(広報室長)
溝部 佳代
加藤千恵次
政氏 伸夫
高橋 光彦
境 信哉
山内 太郎
渡辺 玲奈
恵 淑萍
武藤 幹夫(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>